	学部長	学　長
閲覧		

国外派遣研究員報告書

令和　7年　5月16日

國學院大學学長　殿

所属・職名　文学部哲学科・准教授

氏　名　渡辺　俊和

令和　7　年度　国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1　派遣期間　　（期間延長のある場合は含めて下さい）

令和　6年　4月　1日　から　令和　7年　3月　31日　まで

実際の出国日　6年　3月　28日　　同帰国日　7年　3月　29日

2　受入先研究機関など

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所（Institut für Kultur- und Geistesgeschichte Asiens）

3　研究目的

本研究では、8世紀インドの仏教徒ダルモーッタラによる『プラマーナヴィニシュチャヤ・ティーカー』（ダルマキールティの『プラマーナヴィニシュチャヤ』に対する注釈）第3章「擬似論証因」セクションのサンスクリット語校訂テキストならびに当該箇所の英訳を完成させ、両者ともに出版の準備を行う。その上でダルモーッタラ説の特色を、彼とほぼ同時代の仏教徒プラジュニャーカラグプタの見解と比較することで明確にする。

4 派遣中の研究概要

国外派遣では主に以下の点から研究を実施した：

(1) ディグナーガ（5世紀頃）の論理学説の再検討

(2) ダルマキールティ（6世紀頃）説成立の背景と、彼の複数の著作間における見解の変化の検討

(3) ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタ（ともに8世紀頃）を中心とする、ダルマキールティに対する諸注釈者間の見解の比較検討

これらのうち、今回の派遣研究の直接的な研究目的に最も関わりのある点は（3）であるが、派遣研究前からその途中にかけて、ディグナーガの著作についての新たな資料が本研究に利用可能となった。それを用いて（1）についても研究を進めることにより、（3）の完成度を高めることを目指した。また（2）の研究は、（3）で扱うダルモッタラとプラジュニャーカラグプタが、前者がダルマキールティの後期の作品である『プラマーナヴィニシュチャヤ』に、後者がダルマキールティの最初期の作品である『プラマーナヴァールティカ』に注釈を施しているため、彼らの見解の相違を明らかにするために必須である。

またこれら（1）から（3）は、注釈という形で学説体系を形成するというインド哲学の特徴がゆえに、個々別々にではなく、相互補完的に遂行する必要がある。以上の理由から、国外滞在中は（1）から（3）を往来しつつ、本研究目的の達成を目指した。以下に、個々の（ただし場合によっては他の点にも言及しつつ）研究概要について記す。

（1）ディグナーガの論理学説の再検討： 2024年の4月、8月、10月に、それぞれ2-5日の期間、叶少勇教授（北京大学）らとともに、仏教認識論・論理学の出発点と言えるディグナーガの、初期の著作と考えられている『ニヤーヤムカ』（以下、NMu）を、新たに使用可能となったサンスクリット語テキストを用いて検討した。また、所属先のオーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所（以下、IKGA）で4-7月に開催されていた、同じくディグナーガによる最後期の作品と考えられている『プラマーナサムッチャヤ』（以下、PS）第5章に対するジネーンドラブッディ（8世紀頃）による注のサンスクリット語テキスト校訂作業にも参加した。これらによって、[1] ディグナーガの著作順が、必ずしもNMu→PSというわけではない可能性が、さらには [2] ジネーンドラブッディ注にもNMuからの引用が散見されることが明らかとなった。このことは、ダルモッタラが『プラマーナヴィニシュチャヤ・ティーカー』でディグナーガの著作からほとんど引用しないことが、単にその時代には伝承が途絶えていたためだけでなく意図的であることを示している。また、桂紹隆博士（龍谷大学名誉教授）ならび

4 派遣中の研究概要（続）

に小野基博士（筑波大学名誉教授）らと共に、ジネーンドラブッディ注が言及する、他学派の論理学説を検討した。これは、今後更なる検討が必要である『プラマーナヴィニシュチャヤ・ティーカー』で言及される他学派説を正確に理解するうえで重要である。また、ジネーンドラブッディ注に対する研究成果として、ディグナーガおよびジネーンドラブッディによる、ヴァスバンドゥ（4世紀頃）の推理説に対する批判の翻訳研究を公刊した。

(2) ダルマキールティ説成立の背景と、彼の複数の著作間における見解の変化の検討： 時代的にディグナーガとダルマキールティの中間に位置するダルマパーラ（5-6 世紀頃）の『大乗広百論釈論』（漢訳のみ現存）の第1章を、玄奘（602-664年）の直弟子である文軌（7世紀頃）の注を利用して読解することで、ディグナーガ説からダルマキールティ説への変遷の過程が徐々に明らかになりつつある。例えば、主張命題の主題を否定する論証における論証因に関するダルマパーラの説と同様のものが、ダルマキールティには見られない一方で、ジネーンドラブッディ注に見られる。また文軌がしばしばアーリヤデーヴァ（3世紀頃）の『百論』（漢訳のみ現存）に対する「古注」の存在にも触れていることから、ダルマキールティ以前の、現存しないテキストからの影響も予想される。この点については今後、調査を行う予定である。

(3) ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタを中心とする、ダルマキールティに対する諸注釈者間の見解の比較検討： ダルモッタラによる『プラマーナヴィニシュチャヤ・ティーカー』の「擬似証因」セクションのサンスクリット語校訂テキストの最終的な見直しを行った。特に上記（1）の作業に時間を割く必要があったため、当初の予定のおよそ半分までしか進めることはできなかったが、英訳も含め、多くの修正を行なった。またサンスクリット語校訂テキストの出版を、xml 形式へ移行可能かどうかを、IKGA の P. McAllister 博士とともに検討した。これについては未だ結論に至っていないが、その後のデータの公開も視野に入れて更なる協議を続ける予定である。また、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタの見解を分つ一つの点として、認識の対象についての見解の差が挙げられる。そのため、この点についてのプラジュニャーカラグプタ説の検討も開始し、その成果を校訂テキストならびに翻訳研究として公刊した。

5 その他の活動

報告者が所属した機関であるIKGAやウィーン大学で開催される諸々の講演会（D. Acharya教授やE. Stern博士などによる）、IKGAが主催した中観派をテーマとした国際学会（Madhyamaka in South Asia and Beyond, 8月）、パリで開催されたプラジュニャーカラグプタをテーマとした国際ワークショップ（The Religous Philosophy of Prajñākaragupta and Yamāri, 9月, Sorbonne大学）、IKGAで9月から2月まで定期的に開催された『プラマーナヴァールティカ』知覚章の読書会に参加し、IKGAの研究員のみに限らず、各国（ヨーロッパ、アメリカ、中国、日本など）の研究者との学術交流を行なった。

6 今後の研究計画

まずは『プラマーナヴィニシュチャヤ・ティーカー』「擬似論証因」セクションのテキストならびに英訳の、数年中の出版を目指す。本年度より報告者は、同テキストの「論証因」セクションを中心テーマとするPD研究員を受け入れることとなったため、当該研究員と互いに協力しつつ作業を行うことが可能となった。また、ダルモッタラの見解の検討とともに、研究概要でも述べた、ダルマパーラの論理学説についての研究、そしてプラジュニャーカラグプタの認識対象論についての研究を継続して行う。これにより、インドから中国における仏教論理学の展開を明らかにする。

7 感想・所感

欧（米）でリーダーシップをとっている研究者たちと交流すると、彼女／彼らが研究の新たな方向性の創出に非常に大きな関心を払い、そしてそれに長けていることに気付かされる。これはほとんどの学問分野が欧米で成立したものであることを考えると当然かもしれない。他方、報告者を含む日本の研究者の多くは、たとえ個々の研究の精密さの点で評価されることはあっても、そのように新たな価値を創造していくという点については遅れをとっていると言わざるをえない。この点を補って、世界を相手にした研究を遂行するためには、研究成果を外国語で公刊するのに加え、海外の研究者と密に交流し、将来的な研究の方針の立て方について学び、そして参画してゆくことが必要である。そのためには、海外から留学生や研究者を獲得・招聘するだけでなく、ある程度の期間、こちらから海外へ渡り、現地での交流を継続して行うことが必須である。